

セッション2

アーティスト・プレゼンテーション

モデレーター 大館奈津子 (芸術公社/一色事務所) 成相肇 (東京国立近代美術館)
登壇者 飯山由貴 大岩雄典 布施琳太郎 渡辺志桜里

Session 2

Artist Presentations

Moderator Odate Natsuko (Arts Commons Tokyo, Yoshiko Isshiki Office)

Nariai Hajime (The National Museum of Modern Art, Tokyo)

Speakers Iiyama Yuki Oiwa Euske Fuse Rintaro Watanabe Shiori

2022年1月28日 17:30-20:00

January 28, 2022, 5:30pm-8pm (JTS)



飯山由貴 (美術作家)

東京都を拠点に活動。映像作品の制作と同時に、記録物やテキストなどから構成されたインスタレーションを制作している。過去の記録や人への取材を糸口に、個人と社会、および歴史との相互関係を考察し、社会的なスティグマが作られる過程と、協力者によってその経験が語りなおされること、作りなおされることによる痛みと回復に関心を持っている。近年は多様な背景を持つ市民や支援者、アーティスト、専門家と協力し制作を行っている。近年の主な展覧会として、2021年『The Inner Lives of Islands』(TeTuhi、ニュージーランド)、2020年『ヨコハマトリエンナーレ 2020 Afterglow - 光の破片をつかまえる』(横浜美術館、神奈川)

大岩雄典 (美術家)

物語論・言語哲学の知見を用いて空間・映像を構築することで、人間と時空間のあいだにある(反)同時代的関係、たとえば近年では感染症拡大下における隔絶・距離・予感といったコンセプトを、上演するインスタレーションを制作。東京藝術大学大学院映像研究科では、インスタレーションの理論・歴史研究をおこない、複数の文芸誌・美術誌に論考を寄稿。近作に、「悪寒」(2021, ANB Tokyo)「無闇」(2021, TALION GALLERY)「バカンス」(2020, トーキョーアーツアンドスペース本郷)「Emergency Call」(電話回線)など。ウェブサイト：euskeoiwa.com

布施琳太郎 (アーティスト)

iPhoneの発売以降の都市で可能な「新しい孤独」を、絵画やテキストによる描写、展覧会や映像の編集などを同世代のアーティストや詩人、デザイナー、音楽家、批評家、匿名の人々などと協働することで実践。個展に「名前たちのキス」(SNOW Contemporary, 2021)、展覧会企画に「沈黙のカテゴリー」(クリエイティブセンター大阪, 2021)、「隔離式濃厚接触室」(ウェブページ, 2020)、グループ展に「ニューフラットランド」(NTT インターコミュニケーションセンター, 2021)、「Reborn-Art Festival 2021-22」(宮城県石巻市)など多数。

渡辺志桜里 (アーティスト)

2017年東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。全体性を軸に、個々が集合した現象と、その個に携わる身体の境界といったものに焦点を当てて制作。循環し続ける水の中に魚・野菜・オブジェそして微生物がバラバラに配置されているインスタレーション作品《サンルーム》(2018-)は、「Dyadic Stem」(キュレーション・高木遊, The 5th Floor, 2020)、「べべ」(個展, キュレーション・卯城竜太 (Chim ↑ Pom), White House, 2021)、「水の波紋展 2021」(渋谷区役所美竹分庁舎, 2021)といった東京におけるオルタナティブなシーンでの発表で注目を集め、その都度、発展を重ねながら現在も展開中の作品です。また、渡辺の作品は通じて、《サンルーム》の初期において循環する水に皇居のお濠から汲み取った水が使用されていたように、一見して、生態や身体といった問題系を扱いつつも、その深淵には常に極めて政治的な天皇制への独自の視点が盛り込まれています。

モデレーター：

大館奈津子（芸術公社／一色事務所、日本現代アート委員会委員）

一色事務所にて、荒木経惟、森村泰昌、笠原恵実子、やなぎみわ、藤井光のマネジメントに携わる。2010年よりウェブマガジン「ART iT」の編集を兼任。「ヨコハマトリエンナーレ 2014」ではキュレイトリアル・アソシエイツを務めた。これまで担当したプロジェクトとして「やなぎみわ：Windswept Women-The old Girls' Troupe」（ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館、2008年）、「Yasumasa Morimura: Theater of Self」（ウォーホール美術館／ピッツバーグ、2013年）「荒木経惟 往生写集」（豊田市美術館、新潟市美術館、資生堂ギャラリー他、2014年）など。芸術公社では、Scene/Asia および、レクチャー・パフォーマンスのキュレーションを担当。

成相肇（東京国立近代美術館美術課主任研究員、日本現代アート委員会委員）

2005年より府中市美術館学芸員、2012年から東京ステーションギャラリー学芸員、2021年より現職。戦後日本のアヴァンギャルド芸術を中心に調査研究を行い、マンガ、大衆誌、広告ほか雑種的な複製文化と美術を交流させる領域横断的な展覧会を企画。主な企画展に「石子順造的世界—美術発・マンガ経由・キッシュ行」（府中市美術館、2011-12年、第24回倫雅美術奨励賞）、「ディスカバー、ディスカバー・ジャパン 「遠く」へ行きたい」（東京ステーションギャラリー、2014年）、「パロディ、二重の声—日本の1970年代前後左右」（同、2017年）など。